

書評

大阪哲学学校編

『生きる場からの哲学入門』

(新泉社、2019年)

佐藤 静

場に根ざした哲学実践の軌跡の記録

本書は、大阪哲学学校という市民を中心とした「哲学実践」の軌跡をまとめたものである。この大阪哲学学校は、大阪唯物論研究会哲学部会を母体としたもので、1986年5月に開校された。「生活現場と哲学の結合」を掲げ、以後30年以上の長きにわたって隔週の土曜、月に1～2回のペースで開催され続けてきた。これだけ継続して行われてきた哲学に関する場というものは、アカデミアの研究者によるいわゆる「学会」や「研究会」のようなものを除けば、日本では類を見ないものであろう。

こうした実践が可能となったのは、マルクス由来のいわゆる唯物論思想は、そもそも研究室や書齋から生まれたものではなく、人々が生きる場から生まれ紡がれた思想であるという理解があってこそのものであろうと思われる。単にマルクスを読むというだけでなく、様々な哲学者や思想家のテキストを読むだけでなく、大阪懐徳堂の思想家等地域の歴史に根ざした哲学や、平和や資本主義等の現代的なトピックも縦横無尽に取り入れ、職業哲学者ではない「市民」という、今を生きる人々の日常生活実践を常に中心に置いたところから「哲学」を始めるという姿勢であり続けたからこそ、これだけの歴史を紡ぐことができたといえるだろう。

こうした哲学に臨む姿勢は、編者であり長年この大阪哲学学校の世話人を務める平等文博氏による丁寧に記された序論から読み取ることができる。そしてこうした大阪哲学学校の実践と響き合うような哲学の思索を長年紡いできたのが、本書の冒頭に講演が掲載されている花崎皋平である。花崎は岩波新書の『生きる場の哲学』(1981)をはじめ数々の書を著しているが、全共闘の時代に学生の声を聞き、それを受けて大学の職を辞し、一人の市民として哲学することを実践し続けてき

た在野の哲学者である。彼の実践と大阪哲学学校の実践はまさに「生きる場」での実践として相通するものがあるといえよう。

現代日本において、昨今は哲学カフェ等の市民哲学実践が全国いたるところにおいて開催されている。その中心に置かれるのは、さまざまな参加者が織りなす対話、一人一人の声を聴き合うという実践である。そうした実践は、大阪大学臨床哲学研究室をその端緒の一つとして90年代から大阪という地で始まったという経緯がある。しかし、この大阪哲学学校はそうした動きが始まる前から存在し、今に至っているのである。

本書は三部構成をとり、第一部「生きることと哲学すること」はいわゆる職業哲学者の手によって書かれている。とはいえ、いずれも現代社会の諸問題に根ざした関心から綴られていて読み応えがある。また、世代やジェンダーのバランスもよく考えられている。

第二部は「生きる場からの思索と哲学」と題し、大阪哲学学校の主役である参加者のそれぞれの哲学実践が綴られている。それぞれのテーマは世代・ジェンダー・職業・宗教など多岐にわたっているが、それはこの大阪哲学学校の実践の学びの射程の広さを示しているといえよう。また、人が生きるために思索を、哲学を必要とするということがどういうことがよくわかる構成でもある。

第三部は「生きる場と世界をつなぐための哲学再入門」と題され、いわゆる哲学研究の伝統と生きる場における哲学実践との再接合を図っている。

本書の全てをここで詳細に紹介することはできないが、とりわけ出色なのは三浦隆宏氏による「砂漠の中のオアシス：沖仲仕の哲学者ホッファーに学ぶ、生きる場で哲学するためのルール」である。三浦は前述した臨床哲学研究室の出身者であり、哲学対話等の実践に初期から関わっているパイオニアである。そうした実践を熟知した立場から、またハンナ・アーレントの哲学研究者でもある彼がこの大阪で哲学することについての思索が綴られている。本文で明示的に触れられているわけではないが、大阪は釜ヶ崎という日本有数の労働者のドヤ街があり、そこには南港を始めとする港湾労働者たちすなわち「沖仲仕」がいた。三浦はアー

レントの日記に綴られたホッファーに関する記述に光を当て、沖仲仕という労働者の日々の暮らしから紡がれた哲学を丁寧に紐解いていく。このようなテキストのなかにある声に丁寧に耳を傾けるという行為は、臨床的な哲学実践そのものである。そうした営みを通じて、生きる場そのものに文章を通じて立会い、大阪という街のその場から立ちのぼるにおいをまとった、よりリアリティのある哲学として立ち上がってくる、極めて優れた論攷である。

本書は、市民が、あるいは市民と哲学をすることはどういうことかを考える上で非常に示唆深く、こうした実践に携わるもののみならず、関心があるものにとっては必読の書であるといえよう。広く読まれてほしい、珠玉の一冊である。